

サヤコン マライカム 提出 学位申請論文（課程博士）

『ラオスにおける日本語教育のための基礎的研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、4部8章から成るものである。

第1部「現状分析」では、総説として、ラオス人民民主共和国における日本語教育の現状を分析し、その特質について論じている。第1章「ラオスにおける日本語教育事情」では、ラオスにおける日本語教育の現状、背景、諸問題などについて論じるとともに、ラオス人日本語教師及び学習者を対象に行ったアンケートとその後のインタビューによる調査の結果を分析する。ラオス人日本語教師に対する現状調査の結果から、他分野及び他言語の教授歴が長いベテラン教員が転身して日本語教師になり、日本語能力を身につけると共に日本語母語話者の教師及び専門家による「見習期間」があることを明らかにしている。さらに、現行の日本語授業では、文法教育を中心とし、教科書に沿って行う授業が多く、教案作成及び教室活動が少ない現状を指摘する。一方、ラオス人日本語学習者に対するアンケート調査により、日本語学習の目的及び動機は、留学と日本語を使った会話の二つに大きく分類され、最終目的としては、「日本人と日本語で会話できるようになること」と答えた学習者が多いことを指摘する。現行の日本語授業は文法中心で学習者のニーズとすれ違っており、それに対処するために、従来の授業に加えてコミュニカティブな教授法を導入することを提案

する。また、既存教材の利用のみならず、ラオス人に適した日本語教材を現職の日本語教師との共同研究によって開発することの必要性を指摘する。さらに、今後のラオスにおける日本語教育にコミュニケーション型の教室活動を導入することに関して、ラオス人日本語教師と学習者に共に肯定的な反応が見られたことを指摘する。

第2章「ラオス日本語教育におけるコミュニケーション型の教室活動の導入の一考察」では、従来の授業ではあまり行われていないコミュニケーション型の言語教授法の導入を提案するが、一方で、従来の文法教育を中心に行われてきた教育を否定するものではない。文法教育は言語形式の能力を高め、アカデミックな日本語が上達するのに重要な役割を果たすが、それと共に、日本語運用能力を育成することも重要であり、両者を同時並行的に行うことが効率的であると指摘する。これを実現させるにあたって問題となるラオス人教師や学習者の反応、及び導入の可能性について検討を加え、それを基に、ラオスの現状に合致した日本語教育を探り、将来的にはラオス国内でも効率的に日本語を学習する場を多く用意できるようにするのが本章の目的である。調査によれば、教師が自身の日本語能力及び現状において様々な問題が生じる可能性があると考えているのに対して、学習者は従来と異なる教室形態・教室活動を求めているとう意識の相違が認められる。そこで、各種教室活動の中からラオス人日本語教師が自ら「できる」「できない」活動を判断し、可能で実効性のあるコミュニケーション型の教室活動を導入することを提案している。第3章では、現地で作成された3冊の教材を取り上げ、各教材の構成と内容、新出語彙の選定基準に

ついて目標となる技能養成の観点から検討を加え、日本語教育関係者が自身の経験やアイデアを生かしラオスの現状に適応する教材・学習内容を提供していることを明らかにしている。また、3冊の副教材における新出語彙・表現の選定基準の分析により、多くの単語は『みんなの日本語』より取り入れたものであるが、学習者のより身近な単語を提供する配慮も認められる。目標となる技能養成の視点からの分析により、コミュニケーション学習に重点を置く教材も開発されつつあることを指摘し、今後のラオス国内におけるラオス人学習者に適応した教材開発の可能性を示唆している。

第2部「誤用分析」では、ラオス人日本語学習者57名139件の作文における誤用の傾向を分析し、日本語の学習環境及び学習歴の相違による学習者の誤用の異同について考察している。第4章では、「語彙レベルの誤用」を中心に分析し、漢字表記、音韻、語順及び語の選択に関するそれぞれの誤用の特徴について明らかにしている。第5章では、「文構成レベルに関する誤用分析」について検討を加え、日本語学習による誤用の発生原因、及び最も多く見られる誤用のパターンについて分析して、テンス・アスペクト、及び格助詞に関する誤用の特色を解明し、また、ラオス人日本語学習者には、口語的な文が使われる傾向があることも指摘する。

第3部は、2章からなり、「日本人とラオス人の話題選択の対照研究」について論ずる。第6章では、「日本人とラオス人の会話における話題選択スキーマ」について検討する。特に、文化の異なる日本人とラオス人の対象者が話題選択の際に適切、不適切のいずれと判断す

るかについて調査を行い、文化を共有する者には性別を問わず話題選択スキーマが存在することを明らかにし、日本人とラオス人の話題選択の傾向の共通点と相違点を指摘している。第7章では、日本人とラオス人の会話における話題選択テリトリー意識の異同について検討を加え、3タイプの相手との会話における、それぞれの対象者の話題選択の意識の相違及び「話題にしても良い」項目と「話題にしたくない項目」の傾向について両者を対照し、日本人男女は、同国籍・異なる国籍を問わず、話題選択スキーマはほぼ共通しており、3タイプの相手との親疎関係による話題選択テリトリー意識に相違が見られず、話題にして良いスキーマは、出身地、職業、年齢であるのに対して、回避すべきスキーマの項目としては、収入、自宅へ招待することであることを明らかにしている。これに対して、ラオス人男女の話題選択スキーマは、友人との会話で話題にしても良い項目について話題選択に対するテリトリー意識に相違があるのと同様に、回避すべきスキーマにも、同国籍・異なる国籍の知人との会話におけるテリトリー意識に相違が認められる。さらに、日本人よりラオス人のほうが、相手との親疎関係によって話題選択に対するテリトリー意識に相違が強く認められる。とりわけ、異文化である日本人とラオス人の話題選択で共通して話題にしても良い項目スキーマは、同国籍・異なる国籍を問わず、初対面会話では出身地に関する話題であり、一方で、回避すべきスキーマは収入に関する話題項目であることを指摘する。

第4部第8章では、ラオス人学習者のために必要な「日本語オノマトペ」の選定について検討を加えている。日本人母語話者の低学年児

童が小学校で学ぶ国語教科書12冊と日本人の子供によく知られている名作の絵本66冊を対象として用例を採集し、3段階の選定方法を通じて、最も頻度の高い順からオノマトペを選定している。これにより、1062語の用例のなかから、151語を「基礎語」として選定している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ラオス人民民主共和国における今後の日本語教育の発展のために必要な日本語教育学上の課題を考察した基礎となる研究である。ことに、日本語教育の発展期ともいえるべき今日のラオスにおける日本語教育の教育施設・教員・教材・学習者の実情の調査に基づいて、ラオスに最も適応した、しかも実現性のある方策を考察したところに本研究の意義がある。論文の構成としては、第1部においてまずラオスにおける日本語教育の現状を、教員・学習者・教材・教授法にわたって調査して把握し、第2部でラオス人日本語学習者の作文における誤用の傾向を分析し、第3部において会話の際の話題の選択におけるスキーマを日本人とラオス人との対照研究の観点から考察し、第4部においては基礎語選定の事例としてオノマトペの基礎語選定を試みている。その研究対象は広範囲に亘るが、いずれも今後のラオス日本語教育にとって必要欠くべからざる課題であって、その殆どがラオスの実態分析に即した先行研究に乏しく、論者の研究を以て出発点となるものであり、論者のみならず今後のラオス日本語教育学の第一歩を刻む開拓者としての位置に据えられるべき論文として高く評価する

ことができる

第1部「現状分析」は3章から成り、ラオスにおける日本語教育の現状を教員・学習者・教授法・教材に亘って調査分析を加えている。第1章ではラオスにおける日本語教育の考察のためにまず把握しておくべき日本語教育の現状について、ラオス人日本語教師に対する調査によってその日本語教育経験・教授法、ラオス人日本語学習者に対する調査によって学習者側のニーズなど基本的な情報を明らかにしている。第2章では、これまでラオスにおける日本語教育が文法教育を中心としているのに対して、その重要性を認めつつもそれと同時にコミュニケーションな教室活動を導入することの重要性を指摘するものである。その実現可能な方法を模索するためにラオスにおける日本語教師・学習者の反応、及び意識調査の結果を踏まえた上で、多様な教室活動の中でそれぞれのタスクがラオスにおけるラオス人日本語教師にとって「できる」活動か「できない」活動かについての分析を行い、ノン・ネイティブであるラオス人日本語教師にとって実現可能で最も効果的なコミュニケーションな教室活動を提案している。本章は、論者の日本語教授法の知識を十分に踏まえ、ラオス日本語教育の発展のための最も効果的な方策を的確に纏めており、論者の母国ラオスに対する情熱とともに研究能力の高さを示しているといえる。第3章はラオスにおいても広く使用される『みんなの日本語 初級』ⅠⅡに対して、ラオス国内の日本語学習者に理解しやすいオリジナルの副教材が編集され始めており、その最新の副教材を入手し、これを対象として構成・新出語彙等について、目標となる技能養成の視点から分析したも

ので、具体的な成果と共に、研究の方法論もまた今後のラオスにおける日本語教材の研究の先駆けをなすものである。

第2部「誤用分析」は2章から成り、ラオス人日本語学習者の作文における誤用を語彙レベルと文構造レベルから分析したものである。第4章では日本語学校・大学2年・4年の3タイプの学習者の作文に見られる語彙レベルの誤用例を収集して、漢字・カタカナなどの文字表記、清音・濁音・長音（「ちさい」など）・促音（「つくて」）等の音韻、語順及び語の選択の誤用について分析を加えている。第5章では「ル形」「タ形」「テイル形」などのテンス・アスペクトや格助詞ガ格・ヲ格・ニ格・ヘ格・テ格、「は」と「が」、動詞・形容詞等の誤用例について分析を加えている。この両章から非漢字圏であるラオスの日本語学習者による誤用の傾向が明らかになり、今後の指導にあたっての貴重な資料となるが、例えば誤用分析の先行研究の豊富な蓄積がある隣国のタイ等の国々とは異なり、先行研究の乏しいラオスにおいては寧ろ今後の誤用分析の指標となるものであり、また、学習者の母語を踏まえた分析を加えることが望まれる。

第3部「日本人とラオス人の話題選択の対照研究」は2章から成り、会話における日本人とラオス人の話題選択の特色を対照研究によって解明した論考である。第6章では話題選択スキーマ、第7章では話題選択テリトリーに関する意識をラオス人、日本人それぞれに対する調査から考察したものである。いずれも貴重な成果を得ており、これらは日本人とラオス人の異文化間コミュニケーションのための基礎的な情報・知識として応用できるものであり、また、場面・話題の設

定など教材作成のためにも重要な情報として高く評価することができる。

第4部「日本語オノマトペについて」は第8章において、ラオス人学習者のための基礎語選定の一環として日本の小学校国語教科書と絵本を分析対象としてオノマトペの用例を収集し、基礎語を選定したもので、これも今後のラオスにおける日本語教育・教材作成のための貴重な資料を提供することになるといえる。日本語母語話者ではない研究者による客観的な研究方法を熟慮した上で精密な調査が加えてあり、意欲的な研究と評することができる。

本論文は、ラオスにおける日本語教育の発展のために必要な課題を各章に亘って十分な実態調査に基づいて考察を加えており、頗る有益な論考として認めることができる。

よって、本論文の提出者、サヤコン マライカムは、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成23年2月18日

主査 國學院大學教授 諸星 美智直 ㊞

副査 國學院大學准教授 杉山 英昭 ㊞

副査 國學院大學教授 久野 マリ子 ㊞